

論 説

## 臨床心理学のカリキュラムにおける 心理学史の役割

大 羽 蓁

川崎医療福祉大学 医療福祉学部 臨床心理学科

(平成10年11月11日受理)

### The Role of History of Psychology in the Clinical Psychology Curriculum

Shigeru OBA

*Department of Clinical Psychology  
Faculty of Medical Welfare  
Kawasaki University of Medical Welfare  
Kurashiki, 701-0193, Japan  
(Accepted Nov. 11, 1998)*

**Key words** : clinical psychology curriculum, role of history of psychology,  
teaching of history of psychology

#### Abstract

The role and effect of the history of psychology in the clinical psychology curriculum was investigated. A historical overview can provide a wider perspective and instill humility. Study of the history can point out new developments, and avoid past mistakes. It even motivated freshmen students to further their studies in the field. Some typical statements of students were presented.

#### 要 約

臨床心理学のカリキュラムにおける心理学史の役割と効果について検討した。史的な見方は広い展望と謙虚さを与えるものであり、歴史の研究は発展の方向を指示し、過去の誤りを避けさせてくれる。新入学生でさえも、より進んだ勉学へ向けて強く動機づけられることがわかった。学生からの典型的な論述のいくつかが例示された。

## はじめに

1970年、Michael Wertheimer<sup>1)</sup>は、米国の大学生のために「心理学小史」(A brief history of psychology)を公刊した。その原稿は1962年の秋以来、コロラド大学などで教材として使ったものであるが、1970年の初版では、試験に備えておさらいをする大学院学生にも役立つであろうと書いている。このような事情からもわかるように、心理学史は、1960年前後からアメリカの大学における学部の必須単位の一つになっていたのである。約40年も前のことである。

1965年創刊された行動科学史ジャーナル(Journal of the History of the Behavioral Sciences)の第2巻(1966)には、当時、ノースウエスタン大学にいた Robert I. Watson<sup>2)</sup>の「心理学のカリキュラムにおける歴史の役割と効用」という論文が発表された。それは、1962年のAPA(アメリカ心理学会)におけるシンポジウム「心理学の教育におけるストラテジー」で提出されたものである。そこでは、学部学生、大学院生のみならず、訓練された専門家にとっても、統合された関係の枠組(frame of reference)が創造されることこそ、心理学のカリキュラムにおける歴史の価値であることが強く訴えられている。

このような動向から1965年には、APAの中に第26番目の分科会として、心理学史部門が設立されたのである。

ふり返って本邦の状況はどうであろうか。筆者の知る限り、学部における正式の心理学史の教育科目は、1960年代後半の新設私立大学の心理学科(例えば追手門学院大学)以外には無く、ほとんどの大学は、心理学概論の最初か最後に短かく扱われる程度であった。そしてこの傾向は現在もあまり変わっていないのである。

大学院としては、京都大学において1954年以来、矢田部達郎による「心理学演習」が、Boring<sup>3)</sup>のテキスト(1950)によって講じられ、次年度には、精神活動論史としての「意志心理学史」(矢田部<sup>4)</sup>)も開講された。

学部としては、同じ頃、岡山大学法文学部において1960年代の初め、岡本春一が

Woodworth<sup>5)</sup>の英国第8版本によって、「心理学講読」を行っていた。しかしこれらは、いずれも「心理学演習」「心理学講読」という教育科目として実行された特殊例であって、1962年に、今田恵<sup>6)</sup>の名著「心理学史」が世に現れはしたが、依然として心理学教育の重要部門とは認知されなかった。

以来、本邦においては、米国にくらべて特に学部教育における心理学史の地位が極めて低いことが注目されるのである。

川崎医療福祉大学臨床心理学科は、本邦の大学における最初の「臨床心理学科」として当局に認可されたが、1991年発足以来、「心理学史」2単位を必修科目として位置づけている。本論文では、過去7年の教授経験に基づいて心理学史の教育的意義について考察する。

## 心理学史の必要性

歴史は、人名、年代のまじり合った無味乾燥な事柄を憶えなければならない科目だと思い込まれている。心理学を学ぶという本質的な期待を失わせかねないようなものを、なぜ学生にすすめるのか、学ばせるのか、心理学、特に臨床心理学の学生に、心理学の歴史について知識をもつことが大切だと考えるのか。最初に述べた Wertheimer(これは、かの有名なゲシュタルト学派の最年長者 Max Wertheimer の子息)は、いくつかの理由を指摘している。要約すると次のようである。

1. 人間性と人間の思想は、幾世代にもわたって発展したものであって、われわれが学問的に成長するためには、自分自身の限られた感覚的経験を越えて地平を拡大する必要がある。
2. 歴史の研究は、謙虚さと展望とを与えるものである。
3. 過去の誤りを認識させ、慎重さが増し、再び誤りをおかさないようにさせる。
4. 考え方の起源を示してくれる。
5. 研究される問題を示し、それがいかに研究されなければならないかを示し得るものである。

これらの上に更に加えるならば、それは芸術

と同じく、それ自体、面白いものであり、価値ある対象である。つまり、心理学史の学習は、見通しを与え、発展方向を指示し、諸観念の起源を示し、前の人がおかした誤りを避けさせ、種々の事象がいかに関連するかを示しうるものであるが、究極的には芸術と同じく弁明を要しないものである。

同様のことは、最近の研究書でも述べられている。すなわち1992年、Hergenhahn<sup>7)</sup>は、「心理学史序説」の中で次の各項を上げている。以下、ニュアンスを保つため原語のまま示してみよう。

1. perspective
2. deeper understanding
3. recognition of fads and fashions
4. avoiding repetition of mistakes
5. a source of valuable ideas
6. curiosity

最後の curiosity については、家族の年長者が若かった当時のことを聞くと、若い人々は面白く思う。心理学でも、本人の歴史と同様であって例外ではないというような意味を含んでいる。

以上、記述してみれば、当り前の事ではあるが、これらを学生が自覚して取り組む時には、後に述べる一種のフラストレーションに悩まされることを最小にとどめることができるであろう。

#### 臨床心理学科における心理学史の教授内容と評価

川崎医療福祉大学のシラバスの一部、およびテキストと参考書は次の通りである。

##### 心理学史〈必修〉〔前期〕第1年次

臨床心理学の基礎学としての心理学の歴史を学び現代心理学のあり方について理解を深める。古くからの心に関する考え方を短く展望し、以後、現代心理学の源流をなす諸学派の特徴を学ぶ。構成主義、機能主義の流れから、行動主義がどのように生まれたか、意識主義と客観主義の意味を理解する。目標は現代心理学における臨床心理学の価値を理解すること。そのためフロイトと新フロイト派の精神分析学史についても学ぶ。

—— 中略 ——

評価方法：出席，レポート，試験による。

テキスト：梅本堯夫・大山 正編著『心理学史への招待』（サイエンス社）（1994）。

参考書：大山 正・岡本夏木他著『心理学のあゆみ』（有斐閣新書）（1990）。ライスマン著（茨木俊夫訳）『臨床心理学の歴史』（誠信書房）（1982）。シュルツ著（村田孝次訳）『現代心理学の歴史』（培風館）（1986）。トンブソン著（大羽 葵・沢田丞司訳）『人間関係の精神分析』（誠信書房）（1972）。ブラウン著（宇津木保・大羽 葵訳）『フロイトの系譜』（誠信書房）（1982）。ヒューズ・アドルノ・マンドラー・ヤホダ・ラザースフェルト著（荒川幾男他訳）『亡命の現代史4，社会科学者・心理学者』（みすず書房）（1973）。モールス・ルシユラン（豊田三郎訳）『心理学の歴史』（白水社文庫クセジュ）（1990）。ジョーンズ著（竹友安彦・藤井治彦訳）『フロイトの生涯』（紀伊国屋書店）（1969）。外林・辻・島津・能見編『誠信心理学辞典』（誠信書房）（1981）。

テキストは1994年以来、本邦において得られる最高の水準と考えられるが、現在の心理学の歴史的背景をたどりながら心理学の主要問題を考察するという立場をとっている。筆者は、これを使用し始めた時、相当の「認知的不協和」を感じたが、歴年体の史観や人物（great man）を中心とする思想と理論の流れにもとづく認識を加えることによって、教授内容を豊かなものにするのを試みてきた。特に臨床心理学の歴史にかかわる参考書に列挙した内容を、テキストに示された分野別解説の中に融合させる努力は、相当のエネルギーと理解力を必要とした。

学生の反応は、原初的なものから相当高次の認識を達成したものまで、個人差は大きい。学生に多少ともフラストレーションを与えることがあるということを知った。それは「臨床心理学を学びに来たのに、どうして歴史を…」という感情である。

しかし知的能力が高く、向上心の強い学生は、早期にこれを克服し、教師の情熱に興味を示し、自分のアイデンティティを確立していく。すな

わち、入学後3ヶ月でも、大部分は自己内省的で明るい心的構えを創った。いくつかのステートメントを上げてみよう。

「心理屋の心理知らず、にならないように…臨床家の卵としての自分の人生の地図を手に入れるためだと言えよう…」

「心理学史を学んで、もっと本を読み、たくさんのお考えを知る必要があると感じた…」

「…偉大で真摯であった先人たちの仕事を学ぶことは、私の中から浮ついた気持を取り去っていくような気さえする。…かれらのようにありたいと真剣に願う…」

これらの学生に共通していることとして、かれらが立派に卒業し、一部は臨床の場で、一部は大学院でよい成果を上げたという点を注目すべきである。これらの学生は、特にフランスの病理的伝統の濃いルシュランの「心理学の歴史」を読んだという点も興味深いことである。

「…これらの心理学の歴史をふまえ、様々な問題を抱えた人々を具体的に救済することを目指す臨床心理学を深く学び、私も多くの人々に何らかの癒し、慰めを与えることのできる人間になりたいと願っている。…」一年生の初期に、こう述べた首都圏出身の学生は、修士の学位を得た後、東北地方の大病院の公募に合格し採用された。

心理学史の教育は、学生を自分に関することしか知らない子供にとどまらせないで、視野の

広い、感情豊かな臨床家にするのに不可欠な動機づけを与えるように思われる。先に述べた新しいテキストによっても、効果は同様かどうか、今後の検討に待つ所である。

#### おわりに

心理学史の理解には、高度な認識のための関係の枠組 (frame of reference) を必要とする。それは学習者自身の永続的深求と学習の蓄積から生み出される。そのために、現在中心となっている心理学の諸部門を起点として、その生成発展を個別的にたどるという描き方もあり得る。しかし、心理学史の理解については、今もなお心理学史のあり方についての常識が生きているのではないか。それは個々別々の各種分野ではなく、心理思想全般にかかわる歴史的流れが主要な関心事として扱われるべきであり、その意味で教師は、一種の思想史の研究を自覚すべきではないか。

本邦における心理学の研究と教育、ならびに学会活動における過度の細分化、それにとまなう歴史理解の個別化傾向について、注意を喚起したいと考えるものである。さらに、これは言うまでもないことではあるが、教育的意義を考慮するならば、学生に明るい希望と励みを与える心理学史の認識が期待される。すなわち、それは、より深い興味と関心をかき立てて、研究への動機づけを高めるものとなるからである。

#### 文 献

- 1) Wertheimer M (1970) *A brief history of psychology*. Holt, Rinehart and Winston, New York, pp 1—8. (Revised, 1979) (船津孝行訳 (1971) 心理学史入門, 誠信書房, 東京, pp 1—15.)
- 2) Watson RI (1966) The role and use of history in the psychology curriculum. *Journal of the history of the behavioral sciences*, 2(1), 64—69.
- 3) Boring EG (1950) *A history of experimental psychology*, Appleton-Century-Crofts, New York, pp 3—777.
- 4) 矢田部達郎 (1942) 意志心理学史, 培風館, 東京, pp 3—656.
- 5) Woodworth RS (1951) *Contemporary schools of psychology*, (Eighth ed) Methuen, London, pp 3—279.
- 6) 今田 恵 (1962) 心理学史, 岩波書店, 東京, pp 1—510.
- 7) Hergenhahn BR (1992) *An introduction to the history of psychology*, 2nd ed, Wadsworth, California, pp 1—594.